

【研究ノート】『生意襍話』の副詞

奥村佳代子

1. 『生意襍話』について

『生意襍話』は、御幡雅文が上海の日清貿易研究所の教科書として作成したものである¹⁾。

『生意襍話』という書名の書物は、明治大学図書館、北九州市立図書館、関西大学総合図書館の3カ所、計4冊が確認されている。明治大学図書館所蔵本は、内田慶市氏によって、現時点で確認されている4冊の『生意襍話』のうち唯一の完本であり刊本であると紹介された²⁾。

『生意襍話』の刊本は、明治大学と関西大学増田文庫に所蔵されており、いずれも同じ版本であると考えられるが刊記はない。ただし、その序文（明治25年（1892年））によると100篇で完結するものようである。明治大学所蔵本は100篇が収められているが、関西大学所蔵本はその60篇までである。

写本は北九州市立図書館所蔵本と関西大学鱒澤文庫本があり、北九本は100篇から成り、文字づかいの違いが見られるが、別系統の資料の存在を示すものではなく、基本的に明治大学本と増田文庫本と同じであると見なして良いだろう³⁾。

2. 『生意襍話』の副詞

『生意襍話』の言語は、先述した鱒澤や石田の一連の研究、奥村2023で言及しているように北京官話の特徴が見られ、太田の挙げる北京語7特点に基づけば、そのうちの6特点を具えている⁴⁾。

本稿では、特に副詞に焦点をあてる。太田1975は「副詞は時代的・地域的差異を示すことが多く、重要である。」と指摘する⁵⁾。まず、その使用状況の全体を時代的な側面から概観したうえで、先行研究を踏まえ北京官話あるいは北京語として用いられている可能性のある副詞を提示する。用例は複数みられるものは2、3例を挙げ、1例のみ提示したものは、その用例で用いられていると判断できるものが1例であることを示す。また、句読点は刊本を

参考に付したものである。()内の数字は篇数を示す。

2-1. 時代的な側面

副詞には時代によって使用状況に異なりがみられるという考えに立ち、太田 1958 歴史文法の分類と用例に従い、それぞれの意味でどのような副詞が使用されているのかを整理し概観する。

(1) 副詞の接尾辞

“～是”“～然”の形のものが使用されている。具体例は以下の個別の用例に示す。

(2) 程度副詞

很：那個油渣子，就叫芝麻醬，拌素菜很好吃 (19) 掌櫃的說得很透徹 (22)

極：用處極多 (68) 那樣東西銷路極寬 (75)

最/最為：總是放在外國銀行最妥當 (96) 銷路最為寬廣 (61) 。

頂：頂好的是鏢金了 (1) 南邊的機房是頂興旺的麼 (79)

太：因為仙鶴腿太長了，可以換短的 (37) 貴行的名字包的太廣了 (86)

老：一樣是芭蕉扇，那是講究葉子老嫩 (60)

頗：頗以為然 (56) 頗可以獲點兒利息 (86)

稍微：就是稍微帶點兒血槽 (5) 用處稍微的窄些兒了 (21)

略：我們略催一催，他就動了氣了 (85) 這事我略知一二 (96)

更：用這花鏡我看字更迷糊了 (7)

越發：這是中花，給您換老花試一試。越發不行 (7)

(3) 時間副詞

原：我從前原是糖行的買賣 (24)

從來：從來沒聽見說過 (38)

向來：張家口外買賣城，向來是皮貨的總聚處 (87)

本來：這寡婦本來又會繡，又會畫 (80)

近來：在南方各省近來通用鷹洋 (3)

已經：現在船已經進了口了 (61)

剛：早茶剛到，晚茶還沒信兒呢 (9) 一部續經世文編，剛排完了 (56)

纔：不知道多啗新貨纔能到 (62)

剛纔：剛纔說有一半兒南京的貨物 (88)

現在：我們現在要打官司（96）

快：今年收成的怎麼樣。足穀八九分吧。那麼掌櫃的快發財了（21）可是我這靴子也快壞了（65）

先：那麼就是這木梳篦子我先拿了去了，後來一塊兒算（50）

究竟：然而北五省究竟用的也還不少（73）

常常：後來我們就要常々來拜會了（98）

忽然：他忽然有了出外的事情了就不用了（46）想不到那個人因為忽然有病，就給耽誤了（67）

永遠：夏天永遠不招虫子打，所以得這點兒虛名（72）

暫且：暫且可以敷衍了（62）

還：但是現在還用不着（66）受洋布的累很多，然而北五省究竟用的也還不少（73）

還是：雖然換了財東，店務還是小的作主（84）手底下沒有，晚上再去還是沒有（96）

再：講定了價兒，然後再稱就是了（5）改天再會（44）

屢次：因為大內屢次傳辦漆器，所以不能不多預備（45）

往往：是地勢高下差的多，往々我們那兒潦了，他們那兒沒事（79）

（4）範圍副詞

只：貴行的存項全數清還，只要請多等幾天，不必急於打官司（96）所以我們只按着先付定銀的數兒起貨（97）

竟：竟賣的是坑魚（13）那兒的話呢，竟是操心受累的事（39）

單：您為什麼單預備這樣兒菜呢（13）白米那本是單歸米行（21）

光：貴州綢二十疋、山東繭綢二十疋、做裏子需用十兩重月白紡綢一百二十疋，光付銀票二百兩（74）

將：那兒的話呢，不過是將穀養家的罷咧（35）那兒敢說發財呢，不過將夠溫飽罷咧（86）

另：割蜜煉蜜另有訣竅（15）所以上司派我出來，另訪好地方兒交買賣（44）

另外：這都是正色兒，另外分出來，青類的有庫灰、棕灰…（34）還得另外生新鮮的生意纔行哪（88）

一齊：我也要一副，連這個一齊送我家裏去（41）請問是單販書畫紙麼，還是連雜紙一齊販呢（61）可巧夜裏鬧賊，就一齊兒偷了去了（95）

一同：僮們一同去看々（32）僮們一同去瞧（66）

一塊兒：和我一塊兒去（2）過天同他一塊兒來商量（44）

全：各省的人全都用的（51）可見樣々兒全不是容易的（52）

都：世上的事除了花錢容易，其餘都是難的（52） 我們這行買賣，都是自燒自賣（53）

一共：一共有多少間（40） 一共不下七八百件（80）

也：這些棉綢，也是買南絲織成的麼（82） 況且這個舖子，也不是我一個人的本錢（85）

總：總是按着銀子的成色價錢折算（3） 總是放在外國銀行最妥當（96）

（5）情態副詞

實在：我想貴行的生意，實在是不容易做的（9） 菓子的種兒實在多極了（10）

一定：你一定到過那地方兒呀（15） 貴行一定是大獲其利吧（77）

想必：想必大發財了（86）

準：那兩方端硯也是老玩，留下準賠不了（6） 準可以保漆上不崩裂（45）

管保：水陸舟車無論走多麼遠，管保一點兒也磨不了（64）

管：您只管拿回來，我們管換怎麼烟袋桿兒，又不管換呢（37）

只管：您只管拿回來（37）

自然：遠越重洋，自然應該貴的（14） 正宗的自然是醬和醬油了（25）

只好：也只好由他罷了（56） 只好是多帶些雙（66）

果然：果然都是北京有名的（88） 果然是賣不出去了（32）

橫豎：橫豎總沒有廢物吧（5）

只管：您只管拿回來（37）

簡直：我整是個傻子，老哥要是不提，簡直的想不到這手兒（41）

直：要不是仗着水烟，直沒有聽錢的道兒了（16）

敢情：敢情有這麼些個累贅呢（3） 您敢情不知道（52）

故意：您是故意兒的取笑兒罷咧（11）

特意：特意到你們這兒商量（43） 我特意同他來的（65）

多虧：多虧您提醒我（6）

虧：沒虧負過你呀（81）

偏巧：我的腿乏了走不回去了。偏巧這兒沒車，倒有一個法子（43） 偏巧今天我們掌櫃的有事出去了（92）

白白：貴國洋行白白壓着本錢，豈不是吃了虧了麼（98）

却：但是換錢却有一定的行市（3） 却是黃白兩色兒的多（82）

倒：這幾件漢玉倒是出土的（6） 這麼辦倒也簡截（48）

可：託我找人，可不知道你們這兒有高手的匠人沒有（58） 那麼猜我是做那一行的買賣呢。

那我可猜不着了 (90)

並：交過多次並沒有錯誤 (84) 今天我們並沒用銀子的事 (94)

差不多：差不多要用五六十個人呢 (34) 差不多有二十年了 (86)

大概：大概都是用這四樣材料配合的 (34) 大概都有點兒頭緒了 (63)

也許：也許有這個道理 (83)

恐怕：恐怕站不住 (5) 恐怕也是臨摹的法帖呢 (6)

或是：或是放在水窰里纜耐耐久呢 (10) 或是兌換現錢也可以的 (96)

(6) 否定副詞

無：一概貨真價實，遠近無欺 (18) 正是俗語兒說的竹無棄物了 (27)

別：別頑笑 (13) 您別把他看輕了 (75)

莫 (非)：莫非立刻就要錢麼 (85)

非：熟銅器非紅銅不行 (52) 非有萬數銀子開不起罷 (92)

未：那狗未必答應 (95) 他們藉口前貨尚未起清 (98)

不：貴國的銀錢南北很不一樣麼 (3) 貴東也不是不知道 (99)

沒：這程子給沒見 (10) 我沒去過 (15)

不必：那不必說了 (30) 不必急於打官司 (96)

未必：那狗未必答應 (95)

(7) 疑問・感嘆・反詰副詞

多兒：要多兒錢 (7)

多咱：你多咱纔是倒得開呢 (85)

多怎：多怎拿來 (81)

多麼：您瞧顏色兒有多麼漂亮 (15) 您聞這個氣味，有多麼溫和，油性有多麼光潤 (26)

難道：難道是我記錯了不成 (93) 難道打更的都沒聽見麼 (95)

(8) 指示副詞

這麼：銀子我們已經存在信義洋行了，將來一面發貨，一面到那兒兌取貨價，這麼辦不簡便 (83)

怎麼/怎麼个：怎麼了您納 (4) 你們怎麼這麼不懂交情啊 (4) 你必得對付叫我們留，是怎麼個緣故呢 (32)

以上に提示した副詞は、太田 1958 に基づくことによって時代的な側面を強調しようとしたものであり、特に古い時代を反映する副詞の使用はないことを確認することができた。ま

た、『生意襍話』の会話文が中国での商売を成立させるための会話として実用的な中国語が用いられているとすれば、1890年頃に会話で用いられた副詞の一端を反映していると考えることができるだろう。

2-2. 地域的な側面

太田 1964 は、副詞の地域差は相当大きいと指摘している⁷⁾。ここでは、太田 1964 を中心に、陳曉 2017、陳曉 2018、山田 2003 等を参考にして、北京官話あるいは北京語の副詞に焦点を当ててみていく。2-1 で提示した副詞も含まれる。2-1 で提示し、ここでは繰り返し示さない副詞の用例については (2-1) で示す。

2-2-1. 程度副詞

2-1 で示したように、程度副詞是北京語の特徴とされる“很”を用いている。また、“頂”も用いられている。太田で北方語の可能性が指摘されている“挺”は用いられていない。また、南京官話では用いられないことがないとされる“大”が程度副詞として用いられている。大：您不知道那是大有補益的 (29) 那個個我不大中意 (33)

また、“老”は一箇所で用いられてはいるが、南京官話では使用されないという時間が長いことを表す用法ではない (2-1)。

太田 1975 で時間的な意味が強いとされる“越發”が用いられている (2-1)。

2-2-2. 時間副詞

“乍”が一箇所で用いられている。

乍：這用的是軟翠乍瞧仿佛暗一点兒，却是最耐長的 (4)

“再三”は“的”を伴った形で一箇所で用いられている。南京官話で用いるとされる“再四”は用いられていない。

再三：這筆銀子因爲那老板再三的說 (96)

北京語で時間の長いことを表すとされる“且”は用いられていない。

“直”は副詞として一箇所で用いられてはいるが、北方語の「しきりに」「とめどなく」という意味では用いられていない (2-1)。陳 2018 で“簡直”“直”は北京語でともに「全く」「まるで」の意味があるということについて言及しているが、『生意襍話』の“直”もこの意味で解釈できるだろう。また、“簡直”もこの意味で用いられている。

「これからすぐ」という意味を表す“這就”“趕緊的”は用いられていない。

陳 2018 で北京語を反映する副詞として挙げられている“不差什麼”が用いられている。
不差什麼：天氣太熱攔不住，不差什麼都老實了（13）

2-2-3. 範圍副詞

2-1 で示したように、“只”の意味で用いられる“光”が一箇所で用いられている（2-1）。また、“光”に対応して南方で用いられたとされる“寡”は北方でも用いないわけではないとされるが、使用されていない。

“只”の意味で用いられる“就”も北京語であるとされており、明らかに“只”の意味で用いられている“就”が一箇所ある。

就：如今什麼都沒了，就剩了一坐荒城了（82）

「すっかり、全然」などの意味を表す“所”は北京語であるとされ、繰り返し用いられている。

所：洋錢所不用麼（3） 這部九成宮所沒精神（6） 加上關稅水脚所沒準兒了（9） 這一回我們要的蜂蜜所上了檔了（15） 裏頭脰々渣々所不乾淨（15） 旱烟潮烟兩樣兒所沒人買（16） 晚上躺下竟出汗翻來覆去的，所睡不着（41）

「何々か、誰々か」と該当するすべてを問う“都”が使用されている。この用法は南方にはないとされる。

都：請問這舖子賣的都是什麼貨物呢（88） 寶舖裏都有那些樣貨物呢（89）

また、北京語で“已經”の意味で用いられる“都”の用法は普遍ではないとされるが、『生意襍話』でも明らかに“已經”の意味で用いられていると判断できる“都”はない。ただ、以下の用例は“已經”の意味にも解釈可能であるかもしれない。

都：要打碎了玻璃，聲兒必不小，難道打更的都沒聽見麼。想來是他們都睡着了（95）

2-2-4. 情態副詞

「確かに、きっと」の意味で用いられる“準”は北方語であるとされ、使用されている（2-1）。

南方とされる“保管”は使用されておらず、北方とされる“管保”は一箇所で使用されている（2-1）。

北方語とされる“敢情”“敢自”のうち、“敢情”が用いられている。

敢情：啊，敢情這麼難哪（1） 是了，敢情有這麼些個累贅呢（3） 嚨，敢情這兒有點兒綿哪（7） 您敢情不知道，聽我告訴您（52） 這位掌櫃的很會說話（59）

太田によると、“横豎”は北京語に限ったものではないとするが、『生意襍話』では使用さ

れている⁸⁾。北方語だけではないかと言及される“横是”は使用されていない。

横豎：横豎準做臉兒 (13)

山田 2018 によると、“單”は「よりによって、特別に」という意味を表す北京語であるが、『生意襍話』でもこの用法であると解釈可能な“單”が一箇所で使用されている。

單：這樣頑意兒，有是有了，只是京城裏頭吃的很少，您爲什麼單預備這樣兒菜呢 (13)

また、“就手兒”も北京語である。

就手兒：趕晚上送到我家裏，就手兒帶賬單兒 (11) 我打發夥計送單子，就手兒給你們先帶十兩銀子來 (40)

また、“帶着”も北京語である⁹⁾。

帶着：我們雖然有，也不過是帶着賣 (21) 這樣的紗貨，綢緞店也預備的，在我們不過是帶着賣 (76)

「だが」を表す“可”を北方では用いるが、南京官話では“却”を用いることが多いとされる。『生意襍話』ではいずれも用いられており、“却”はより多く用いられている。

可：倒還光亮，可不知擺得住擺不住 (36)

却：兄弟雖然有個小功名，却沒當差 (14) 雖然杭州人會燒出來，却不會配合 (49)

北方語であるとされる推測を示す“許”が北京語で用いられるとされる“也許”の形で一箇所で使用されている (2-1)。

南で用いられるとする“想是”も一箇所で使用されている。

想是：想是生意熱鬧 (10)

“白”が「ちょっと」「ために」の意味で用いられるのは北京語であるとするが、『生意襍話』に一例のみある重ね型の“白白”は、「むだに」の意味に解釈できる¹⁰⁾。

2-2-5. 否定副詞

“別”は北方語であるとされ、使用されている。

別：別頑笑 (13) 您先別抱怨 (16) 您別把他看輕了 (75) 一字也別落下 (99)

2-2-6. その他

太田 1970 によると、“的”を必要としない副詞に“的”がつく例が『小額』に見られる。『生意襍話』では以下の例が見られる。

您是故意兒的取笑兒罷咧 (11) 用處稍微的窄些兒了 (21) 這幾天々氣漸々兒的熱了 (41) 簡直的想不到這手兒 (41)

3. まとめ

『生意襍話』は、上海の日清貿易研究所の教科書として、北京官話による商売上の会話を教授、学習するために編纂された。日清貿易研究所は上海を拠点としてはいたが、北京官話の汎用性と実用性を認識していたと考えられる。いっぽうで、御幡雅文は、上海語による商業会話書も編纂しており、このことは、上海の商売では上海語も用いられたことを表している。ただし、『生意襍話』では会話が展開されている場所として、北京だけでなく上海も含まれている。また、話し手も、上海、広東、雲南から来た人物が登場し、商売をする上で北京官話は決して地理的に限られた場所でのみ話されていた言葉ではないことを示している可能性がある。

本研究ノートでは、時代的、地域的差異が大きいとされる副詞に焦点を当て、先行研究によって蓄積された北京官話の特徴や語彙を備えていることを確認したが、中国国内における商業活動のため 1890 年前後に実用された言葉で書かれているという観点に立てば、より詳細な語彙の分析によって北京官話あるいは北京語の新たな面を提供する言語資料としての位置付けが可能となるだろう。

注

1) 御幡雅文の経歴や『生意襍話』に関しては、六角 1997、鱈澤 2000、鱈澤 2001、木山 2014、石田 2019 等の先行研究がある。

2) 筆者は、北九州市立図書館所蔵本に基づき、『生意襍話』の言語を太田辰夫の北京語の 7 特点に照らし、北京官話としての基本的な特徴をほぼ備えていることを確認した。その直後に内田慶市氏によって明治大学図書館所蔵本が確認され、中国近世語学会 2022 年度研究会 (2022 年 12 月 10 日、東京にて開催) での報告『『生意襍話』初探』でその詳細が紹介された。内田氏によると、明治大学図書館所蔵本と関西大学増田文庫所蔵本とは同一の版本であり、増田文庫蔵本が第 60 編までであるのに対して、明治大学本は完本である。いずれも刊記はないが、序文の書かれた 1892 年頃と矛盾しない内容が本編に見られるため、序文が書かれてほとんどなくして刊行されたものではないだろうか。

3) 北九本の最後の頁には「昭和十五年二月二十二日抄寫終 香月梅外」とあり、鱈澤文庫本の最初の頁には「教師 橋口吉之助」「筆記 長田真弥」、最終頁には「明治二十九年三月四日午後七時二十四分都写完了」とあり、それぞれ書いた人物、教授した人物、書いた日付が記されている。これによると、北九本が書かれた時期は序文の書かれた明治 29 年から

はかなり時を隔てているが、100篇を備えており内容も基本的に同じである。違いは主に用字の違いに見られ、刊本では「裡」「裏」「罢」「麼」が用いられるのに対し、北九本では「裡」「吧」「広」が用いられている。また、注釈部分で、第22篇「糙」の注釈が刊本では「粗糲」とあるのに対し、北九本ではその後に続けて「俗語説、兩湖有年天下不饑、湖南稔湖北足、即可以明白兩湖出米最多、可是成色是很糙」という記述がある。また、65篇以降は注釈がほとんど見られないが、北九本第76篇は本文の後に「香月日、夏布最出名、則為湖南省瀏陽縣、數量多則屬江西」という記述が加えられている。

- 4) 『生意襍話』には“來着”は使用されていないため、7特点のうちの6点を備える。
- 5) 太田 1975「兒女英雄伝の副詞」(『中国語史通考』325頁)。
- 6) 注釈は文言の語彙が多く用いられているが、“最爲”は第61章の注釈にも用いられている。「西洋鑿花法最爲工細」(61註釋)
- 7) 太田 1964、260頁。また、前掲注v。
- 8) 太田 1964では北方語では使わないとされる。
- 9) 近世語学会研究集会(2022年12月10日開催)の内田慶市氏の報告『『生意襍話』初探』による。
- 10) なお、陳 2018では北京語の副詞を扱う中で、この意味の“白”を取り上げている。

参考文献

- 太田辰夫 1958『中国語歴史文法』江南書院、本論は1981年に朋友書店から朋友學術叢書として出版された本を参照。
- 太田辰夫 1964「北京語の文法特點」『久重福三郎先生坂本一郎先生還曆記念中國研究』所収、本論は『中国語文論集 語学篇元雜劇篇』(汲古書院、1995年)を参照。
- 太田辰夫 1975『『兒女英雄傳』の副詞』『神戸外大論叢』26巻3号、本論は『中国語史通考』(白帝社、1988年)を参照。
- 六角恒広 1997「御幡雅文-上海の語学の達人」『漢語師家伝-中国語教育の先人達』(127-176頁)。
- 木山実 2000「三井物産草創期の海外店舗展開とその要員」『経営史学』第35巻第3号(1-26頁)。
- 鱒澤彰夫 2000「御幡雅文伝考」早稲田大学『中国文学研究』第26号(29-45頁)。
- 鱒澤彰夫 2001「御幡雅文伝考拾遺」早稲田大学『中国文学研究』第27号(13-33頁)。

山田忠司 2003 「清末北京話の一斑－『燕語新編』を資料として－」『文教大学文学部紀要』第 17 卷 1 号 (23-35 頁)。

木山実 2014 「明治期三井物産における中国語スペシャリスト」『商学論究』第 61 卷第 4 号 (235-252 頁)。

陳曉 2017 「北京大学蔵『玉霜簪藏曲の言語について－『十全福』を中心に－」『神戸大論叢』第 67 卷 4 号 (71-86 頁)。

陳曉 2018 「『北京官話全編』の副詞」関西大学東西学術研究所資料集刊 40-3、内田慶市編著『北京官話全編の研究』下巻 (89-100 頁)。

石田卓生 2019 『東亜同文書院の教育に関する多面的研究』(第 2 部「東亜同文書院をめぐる人物」第 1 章「日清貿易研究所の教育について」) 不二出版、2019 年。

謝辞

本研究の一部は、2019 年度関西大学学術研究員としての研究成果である。

